

社会技術研究開発事業
平成21年度研究開発実施報告書

研究開発プログラム「科学技術と社会の相互作用」

研究開発プロジェクト名

「地域に開かれたゲノム疫学研究のためのながはまルール」

研究代表者 明石 圭子
(長浜市健康福祉部健康推進課、副参事)

1. 研究開発プロジェクト名

「地域に開かれたゲノム疫学研究のためのながはまルール」

2. 研究開発実施の要約

本研究開発プロジェクトは、滋賀県長浜市と京都大学大学院医学研究科が進める「ゲノム疫学研究（ながはま0次予防コホート事業）」を題材とし、「研究協力者にとっての個人情報保護」「長浜版バイオバンクと法整備」「疫学研究の地域づくりへの活用」の3つの観点から地域に開かれたゲノム疫学研究のためのルールを提案する。

平成21年度における実施項目と、実施内容及び主な結果は以下のとおりである。

視点Ⅰ＞研究協力者にとっての個人情報保護

i) ゲノム疫学研究における間接的な試料収集手法に伴う課題の整理検討

ゲノム疫学研究における間接的な試料収集（追跡調査）手法における個人情報保護の仕組みの構築に伴って発生する様々な課題に対し、ゲノム疫学研究を取り巻く関係者による議論を踏まえ課題の整理と今後の進め方の検討を行う予定であった。

しかし、平成21年度は市民1万人の参画に向けて、市民や大学、自治体が協働してゲノム疫学研究における直接的な試料収集に注力していたこともあり、大学側から間接的な試料収集についての具体的な手法提案がなされなかった。

ただ、平成22年1月に開催された大学と自治体で作る「ながはま0次予防コホート事業運営委員会」では、大学の一部診療科から追跡調査を実施したい旨の要請があり、その概要について口頭説明があった。そして、その最後には平成22年度に試験的に実施できるよう準備をしていきたいとの報告があった。

こうしたゲノム疫学研究の進捗状況から、平成21年度は当該調査に伴う課題の整理検討ができず、本研究開発プロジェクトとしては、この課題の整理検討を平成22年度に持ち越すこととした。

視点Ⅱ＞長浜版バイオバンクと法整備

ii) 狭義のルールの運用を踏まえた課題の整理と検討

本研究開発プロジェクトとしては、平成21年度に狭義のルールの運用を踏まえた課題の整理と検討を行う予定であったが、前述のようなゲノム疫学研究の進捗状況から現段階で明確な手法等が確立していない事項（追跡調査や他大学や民間企業等への試料等の提供）に関する課題の整理と検討ができなかった。

そのため、本研究開発プロジェクトにおいては、当該事項の整理と検討について、ゲノム疫学研究の進捗状況を鑑み、平成22年度以降に着手することとした。

ただ、狭義のルールに基づく「ながはま0次予防コホート事業審査会」の議論の中で、ゲノム疫学研究の進捗状況報告の形式について、研究者に過大な負担を課さないことを限度として、審査会及び市民が進捗状況を確認するために必要な情報の提供方法について検討を加えるよう意見があった。

そこで、本研究開発プロジェクトでは、審査会での議論とそれを踏まえた「専門助言者検討会」での議論を通じて、当該意見を解決するための方策について検討を行った。

視点Ⅲ＞疫学研究の地域づくりへの活用

iii) ゲノム疫学研究を地域に浸透させるための手法の開発と実践

市民ボランティア団体「健康づくり0次クラブ」の活動を通じて、市民目線からゲノム疫学研究を地域に浸透させていくための手法を開発する。情報誌「げんき玉」の発行や、ゲノム疫学研究を発信するためのHPの作成、研究者を市民の身近な存在にするための市民シンポジウムの開催などを提案し、実施した。

iv) 志ある市民ボランティアの自立化

健康づくり0次クラブは、市民と大学、自治体が互いに連携してゲノム疫学研究を地域づくりへ活用していくために、大学や自治体から独立した機関となるべく任意団体から特定非営利活動法人に組織を作り変えた。

v) 市民に対するアンケート調査の実施

ゲノム疫学研究の地域への浸透の程度を検証するために、市民2,500人無作為アンケート調査を実施した。この結果、市民全体の約6割がゲノム疫学研究について認知するまでに浸透してきており、それに伴って研究協力者の増加も進んできた。

3. 研究開発実施の具体的内容

(1) 研究開発目標

視点Ⅰ＞研究協力者にとっての個人情報保護

i) ゲノム疫学研究における間接的な試料収集手法に伴う課題の整理検討

ゲノム疫学研究の全体研究構想は、試料等の直接収集（初回調査）と間接収集（追跡調査）の2つの手法により、研究協力者から様々な健康情報を蓄積、管理し、他の様々な研究に提供するバイオバンクを形成する構想である。

追跡調査は、個々の研究者や大学、自治体や市民、地元開業医や医療機関など、様々な関与者を介して健康情報の収集がなされる構想である。

この収集手法の構築を通じて、様々な関与者を介して情報を収集する場合の個人情報保護の在り方や倫理的諸問題に配慮した方策を検討する。

視点Ⅱ＞長浜版バイオバンクと法整備

ii) 狭義のルールへの運用を踏まえた課題の整理と検討

狭義のルールの本質的な部分を条例化し、自治体が設置した「ながはま0次予防コホート事業審査会」がルールの中核である「市民の人間としての尊厳及び人権は、ゲノム疫学研究における医学的又は社会的利益より優先されなければならない。」という基本理念に基づき審査とモニタリングを行っている。

本研究開発プロジェクトでは、この審査会での議論を通じて、浮かび上がってくる課題を整理し、その課題を解決するための方策について検討する。

視点Ⅲ>疫学研究の地域づくりへの活用

- iii) ゲノム疫学研究を地域に浸透させるための手法の開発と実践
健康づくり0次クラブの活動を通じて、市民目線からゲノム疫学研究を地域に浸透させていくための手法を開発する。
- iv) 志ある市民の自立化
健康づくり0次クラブの活動を通じて、市民と大学、自治体が互いに連携してゲノム疫学研究を地域づくりへ活用していくための最良のスタイルを検討する。
- v) 市民に対するアンケート調査の実施
市民2,500人無作為アンケート調査と研究協力者1,491人の研究協力直後のアンケート調査を実施することで、ゲノム疫学研究の地域への浸透の程度を検証する。

(2) 実施方法・実施内容

視点Ⅰ>研究協力者にとっての個人情報保護

- i) ゲノム疫学研究における間接的な試料収集手法に伴う課題の整理検討
平成21年度は市民1万人の参画に向けて、市民や大学、自治体が協働してゲノム疫学研究における直接的な試料収集に注力していたこともあり、大学側から具体的な追跡調査に関する手法提案がなされず、この課題の具体的な整理検討は実施できなかった。
しかし、平成22年1月に大学の一部診療科（歯科、口腔外科）において、追跡調査の要請があり、その準備を始めると大学側から報告を受け、本研究開発プロジェクトでは、「専門助言者検討会」を2月に開催し、追跡調査の課題抽出に向けた取り組みと今後の進め方について議論を行った。

視点Ⅱ>長浜版バイオバンクと法整備

- ii) 狭義のルール of 運用を踏まえた課題の整理と検討
本研究開発プロジェクトとしては、平成21年度に狭義のルール of 運用を踏まえた課題の整理と検討を行う予定であったが、ゲノム疫学研究の進捗状況から現段階で明確な手法等が確立していない事項（追跡調査や他大学や民間企業等への試料等の提供）に関する課題の整理と検討ができなかった。
そのため、本研究開発プロジェクトにおいては、当該事項の整理と検討について、ゲノム疫学研究の進捗状況を鑑み、平成22年度以降に着手することとした。
ただ、平成21年度に実施した「ながはま0次予防コホート事業審査会」の議論の中で、ゲノム疫学研究の進捗状況報告の形式について、研究者に過大な負担を課さないことを限度として、審査会及び市民が進捗状況を確認するために必要な情報の提供方法について検討を加えるよう意見があった。
そこで、本研究開発プロジェクトでは、審査会での議論とそれを踏まえた「専門助言者検討会」での議論を通じて、当該意見を解決するための方策について検討を行った。

視点Ⅲ＞疫学研究の地域づくりへの活用

iii) ゲノム疫学研究を地域に浸透させるための手法の開発と実践

健康づくり0次クラブは、市民に対して自分達の言葉でゲノム疫学研究について語ることで、ゲノム疫学研究に対する市民認知の向上を進めようと情報誌「げんき玉」の作成を提案し着手した。また、ゲノム疫学研究を大々的にPRするための手法として市民シンポジウム「健康づくりのつどい」を提案し実践した。さらに、これまで自治体と大学が連携し、開催場所を固定した定点型スタイルで実施してきた「0次カフェ」を進化させた「お出かけ0次カフェ」を提案し、地域の集会や小規模な集まりにも出向いてゲノム疫学研究について啓発を行うことで市民認知の向上に努めた。

その他にも、幅広い層にゲノム疫学研究について知ってもらうために、インターネットを中心に情報収集すると考えられる若い世代に向けての情報発信として独自のHPの構築を提案し実践した。

iv) 志ある市民の自立化

健康づくり0次クラブは、市民と大学、自治体が互いに連携してゲノム疫学研究を地域づくりへ活用していくための最良のスタイルとして、市民ボランティア団体が自ら社会的な信用を得て、外部資金を獲得し、自治体や大学に頼らない独立した存在として活動を展開していくために、特定非営利活動法人の認証取得を進める。また、先進地調査を実施し、ゲノム疫学研究と関わる地域の住民の在り方やその行動についての検討を行う。

v) 市民に対するアンケート調査の実施

ゲノム疫学研究の地域への浸透の程度を検証するために、市民2,500人無作為アンケート調査と研究協力者1,491人の研究協力直後のアンケート調査を実施した。

(3) 研究開発結果・成果

視点Ⅰ＞研究協力者にとっての個人情報保護

i) ゲノム疫学研究における間接的な試料収集手法に伴う課題の整理検討

本研究開発プロジェクトとしては、追跡調査の具体的な提案がない現段階においては、この課題の整理検討を平成22年度に持ち越すこととした。

ただし、2月に開催した「専門助言者検討会」では、この課題の整理検討にあたっては、個人情報保護等において配慮すべき点が複数存在することから、詳細な実施手順や研究者や関与者が施す個人情報保護の方策等について、直接研究者を招聘してヒアリング調査を実施すべきであるとの議論があった。これを踏まえ、本研究開発プロジェクトとしては、平成22年度にその調査から抽出される課題について狭義のルールと追跡調査の手法との乖離を検証していくこととした。

視点II > 長浜版バイオバンクと法整備

ii) 狭義のルールへの運用を踏まえた課題の整理と検討

平成21年度に実施した「ながはま0次予防コホート事業審査会」の議論の中で、ゲノム疫学研究の進捗状況報告の形式について、研究者に過大な負担を課さないことを限度として、審査会及び市民が進捗状況を確認するために必要な情報の提供方法について検討を加えるよう意見があった。

審査会の議論の中で、ルールに明記されている毎年の報告について、研究者に過大な負担を課す内容では研究参加意欲が削がれ、研究の継続性は損なわれるだろうし、また、報告内容が専門的過ぎると審査会及び市民の側の理解が得られないだろうという指摘があった。そして、審査会としては、市民が応援するゲノム疫学研究となるために、互いが歩み寄った一番いい情報の提供方法の在り方についてさらなる議論が必要であると結論づけた。

本研究開発プロジェクトでは、こうした意見を踏まえ、「専門助言者検討会」を開催し、当該意見を解決するための方策について検討を行った。当該検討会では、明確な基準がない現状においては、研究者側とのキャッチボールという実践によってその基準を模索する方策が最良ではないかということになった。

そこで、審査会の設置者である自治体は、研究者が倫理委員会に提出する申請書の様式を参考に、研究者とキャッチボールを行い、改良された様式において、当該研究の進捗状況報告を受けることとした。

視点III > 疫学研究の地域づくりへの活用

iii) ゲノム疫学研究を地域に浸透させるための手法の開発と実践

1. 情報誌「げんき玉」の発行

健康づくり0次クラブは、市民に対して自分達の言葉でゲノム疫学研究について語ることで、ゲノム疫学研究に対する市民認知の向上を進めることから活動をスタートさせた。

その手始めとして、市民がゲノム疫学研究に対して抱く不安や疑問、進捗状況などを、自分達の言葉で市民に語りかけるツールとして、情報誌「げんき玉」を発行することにし、クラブ内に情報誌部会を設けて編集作業を行った。2か月に1回のペースで情報誌「げんき玉」の作成を行ってきた。平成21年度末までに5号が発行された。この活動では、「ゲノム疫学研究って何？」という疑問が地域から消えるように徹底した情報発信を行うことで、市民の科学リテラシーの向上を図るとともに、将来的には、これが市民とクラブを繋ぐ双方向の健康づくりツールとなることをめざしている。

2. 市民シンポジウム「健康づくりのつどい」の開催

健康づくり0次クラブは、ゲノム疫学研究を大々的にPRするための手法として平成21年6月に400人規模の市民シンポジウム「健康づくりのつどい」を開催した。クラブ内にイベント部会を設け、親しみ難いゲノム疫学研究を少しでも市民に親しんでもらえるように、シンポジウムに児童合唱団によるコーラスや演舞団体による踊りを組み合わせるなどの工夫も行われた。また、シンポジウムの開催にあたり、大学の研究者とクラブが自治体を介さず直接連絡を取り合っ

て、シンポジウムの段取りを決めていくなど、研究者とクラブが対等の関係を築いていくような状況が生まれてきた。

3. お出かけ「0次カフェ」の実施

健康づくり0次クラブは、大学の研究者による健康教育とゲノム疫学研究の普及啓発を合わせた「0次カフェ」を平成21年6月頃から実施している。

これは、研究者と市民が「健康」をテーマに交流することで、研究者をより身近な存在として意識し、ゲノム疫学研究を相手の見える研究へと変えていくために15～30名程度の小規模な集会などへも出かけて行う出張型サイエンスカフェである。

以前、自治体と大学が行っていた「0次カフェ」は、市内の会場に参加希望者を集めるという定点型スタイルで運営していたが、参加者が固定化してくるとい課題もあった。そこで、自治体と大学が行ってきた「0次カフェ」のノウハウを応用し、出張型として展開することで、参加者の固定化を防ぎ、地域に密着したゲノム疫学研究の浸透を図った。

4. 健康づくり0次クラブのHP構築

健康づくり0次クラブは、幅広い層にゲノム疫学研究について知ってもらうために、インターネットを中心に情報収集すると考えられる若い世代に向けての情報発信として独自のHPの構築を進めた。

クラブ内にHP構築部会を設置し、専門家の助言を受けながら会議を重ね、市民目線からわかりやすい情報を発信することを心がけて設計し、平成22年2月から運用を開始した。

iv) 志ある市民の自立化

市民ボランティア団体「健康づくり0次クラブ」は、市民と大学、自治体が互いに連携してゲノム疫学研究を地域づくりへ活用していくために、3者が互いに独立し、バランスを保ちながらゲノム疫学研究と地域づくりの両方を進められる関係の構築をめざし、平成21年8月に任意団体から特定非営利活動法人へとその姿を変えてきた。

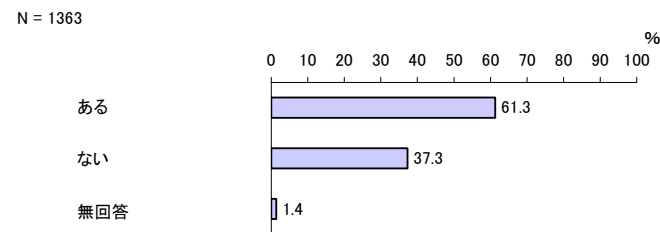
また、健康づくり0次クラブでは、平成21年10月には、日本において40年以上の疫学研究の歴史を持つ福岡県久山町への視察を行った。久山町では、大学と町が中心となって疫学研究を行っており、大学が地域に入り込んで研究を展開してきた様子が見て取れた。しかし、40年以上の研究を行ってきた過程においては、研究者や町の首長が変わり、その時々で考え方も変わってしまうなど、一貫した研究を継続していくことの難しさと危うさが垣間見られた。

本研究開発プロジェクトとしては、この視察を通して、大学と自治体だけではなく、第3の関与者として、「健康づくり0次クラブ」のような市民の声を代弁する存在が台頭してくることが、研究を長期に継続していくためには必要であるとの認識を持った。

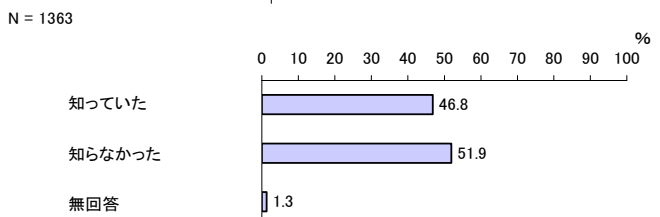
v) 市民に対するアンケート調査の実施

ゲノム疫学研究の地域への浸透の程度を検証するために、市民2,500人無作為アンケート調査（有効回答数1,363人／回答率54.5%）と、研究協力者1,491人に対して研究協力直後にアンケート調査を実施した。

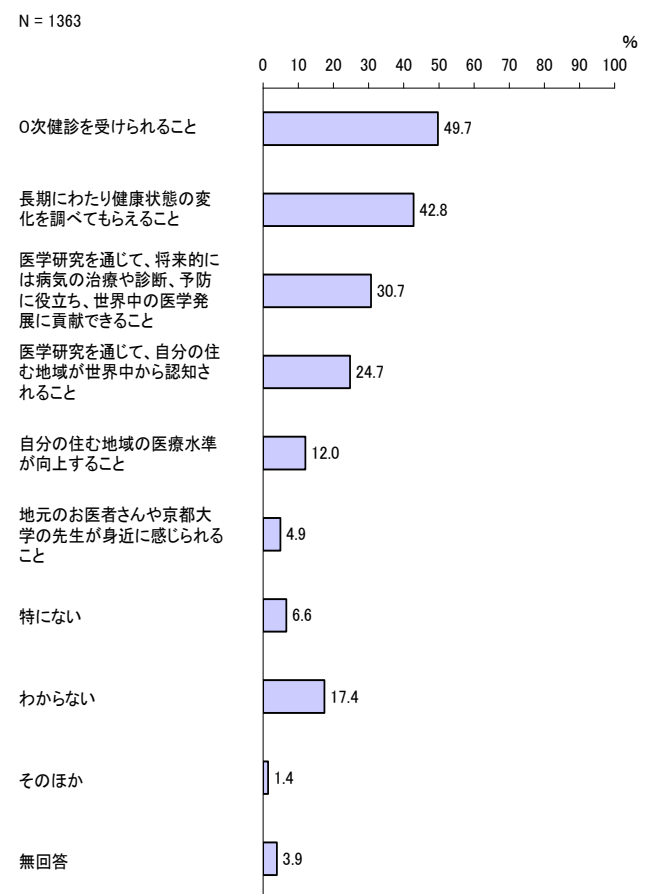
これらのアンケート調査から、ゲノム疫学研究の愛称でもある「0次予防」という言葉の認知度は61.3%であった。これを性別年齢別に見ると、男性30～50代が「聞いたことがない」という割合が他に比べ高くなっていた。



また、ゲノム疫学研究の認知度については、「知っていた」の割合が46.8%、「知らなかった」の割合が51.9%となっていた。性別年齢別に見ると、「0次予防」の認知状況と同様に、男性30～50歳代は、「知らなかった」の割合が他に比べ高くなっていた。



ゲノム疫学研究の「いい」と思うところは何かという問いについては、ゲノム疫学研究の参加窓口である「0次健診を受けられること」の割合が49.7%と最も高く、次いで「長期にわたり健康状態の変化を調べてもらえること」の割合が42.8%、「医学研究を通じて、将来的には病気の治療や診断、予防に役立ち、世界中の医学発展に貢献できること」の割合が30.7%となっていた。



これを0次健診の受診理由別にみると、職場や身の回りに健診受診の機会がなかった人や0次健診を受けた人の体験談を聞いて興味を持った人は、「0次健診を受けられること」の割合が他に比べて高く、健診を受けられることに魅力を感じている様子うかがえた。

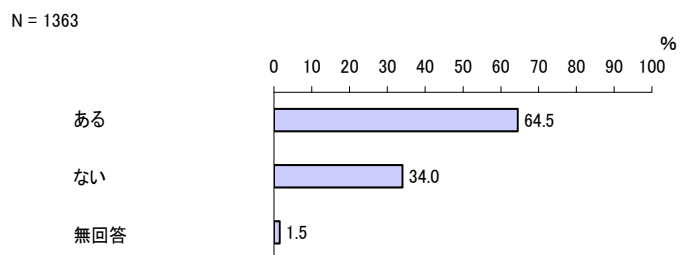
また、健診結果などが、医学研究を通じて、子や孫の代の病気の治療や診断、予防（健康づくり）に役立つからと答えた人は、「長期にわたり健康状態の変化を調べてもらえること」「医学研究を通じて、将来的には病気の治療や診断、予防に役立ち、世界中の医学発展に貢献できること」「自分の住む地域

の医療水準が向上すること」の割合が他に比べて高く、研究や医学に寄与できることに魅力を感じている様子うかがえた。

逆に、ゲノム疫学研究の「いやだ」と思うところは何かという問いについては、『個人情報や遺伝子情報が流出するかもしれない』と不安を感じる」の割合が12.0%、『予期しない不利益があるかもしれない』と不安を感じる」の割合が7.6%、「自分の生活習慣や生活環境を調べられること」の割合が6.2%となっていた。

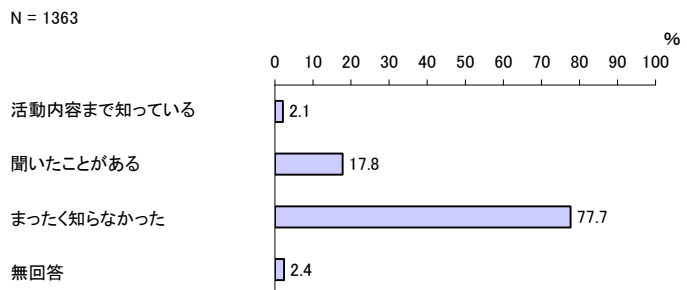
また、「特にない」の割合が42.4%と最も高く、次いで「わからない」の割合が18.5%となっていた。これを0次健診の未受診理由別にみると、自分の遺伝子を調べられるのが嫌な人は、「個人情報や遺伝子情報が流出するかもしれない」と不安を感じる」「予期しない不利益があるかもしれない」と不安を感じる」の割合が他に比べて高く、不安を持っている様子うかがえた。

さらに、「0次健診」という言葉の認知度については、聞いたことが「ある」の割合が64.5%、「ない」の割合が34.0%となっていた。



ここから、ゲノム疫学研究の認知度は40%代中頃だが、「0次予防」や「0次健診」の認知度は60%を超えている現状うかがえた。

健康づくり0次クラブの存在を知っているかという問いについては、「活動内容まで知っている」の割合が2.1%、「聞いたことがある」の割合が17.8%、「まったく知らなかった」の割合が77.7%となっていた。



今後は、市民の声を代弁する存在として健康づくり0次クラブが台頭してくるためには、健康づくり0次クラブの活動を広め、一人でも多くの市民がその活動に参画するような状況を作っていく必要があると考えられる。

本研究開発プロジェクトとしては、これらのアンケート調査結果をもとに、ゲノム疫学研究が地域に開かれたものとなるために、ゲノム疫学研究の市民認知の向上とそれを活用した地域づくりとして、市民活動の広がりやゲノム疫学研究に対する市民認知、さらにはゲノム疫学研究における研究協力者の推移など、様々な指標から地域に開かれたゲノム疫学研究の在り方を検討する。

【平成21年度研究開発における考察】

平成21年度が一番大きな研究成果としては、市民ボランティア団体「健康づくり0次クラブ」が、ゲノム疫学研究を活用して地域づくり（心と体の健康づくり）を進めるために、外部資金を獲得し、自ら経済的に自立する方策として「特定非営利活動法人」の認証を取得して活動を展開したところにある。

本研究開発プロジェクトでは、ゲノム疫学研究をきっかけとする地域づくりのグラン

ドデザインとして、当初から大学と自治体、市民組織が独立して存在していることが望ましいと考えていた。それは、ゲノム疫学研究が継続的に続くためには、各々の立場で対等に物言える関係（協働関係）を築いていく必要があると考えており、他の関与者に人的・経済的に依存してはそうした関係を築けないと考えていたからである。

今回、健康づくり0次クラブが特定非営利活動法人の認証を取得したことは、ゲノム疫学研究の継続性という意味で、1つの望ましい形ができたのではないかと感じている。

現在のところ、健康づくり0次クラブの認知度こそ全体の2割程度であるが、当該クラブが持つ人的ネットワークは広く、彼らの草の根的な普及啓発運動の展開により、ゲノム疫学研究の認知度は高まり、今や全体の6割が認知している状況になってきた。

また、市民認知の高まりとともに研究協力者も増加し、平成21年度末累積で6,039人の参加があった。この他にも、健康づくり0次クラブの会員数が50人から120人に増加したり、当該クラブサポーター数が50人から1,100人にまで増加したりと、当該クラブの活動に関与する市民は着実に増加してきている。

こうした状況の中で、今後、健康づくり0次クラブの活動がさらなる広がりを持ち、当該クラブの市民認知が進んでいけば、関与する市民の数は確実に増加していくものと考えられる。本研究開発プロジェクトとしては、ゲノム疫学研究をきっかけに当該クラブの活動に関与した市民が、地域づくり（心と体の健康づくり）を実践するような状況を作り出すことができれば、ゲノム疫学研究の持続が、地域づくりの持続を促す社会システムが構築できるのではないかと考えている。

そのためには、当該クラブの活動に関与する市民をいかに増加させ、そして、彼らが地域づくりを実践するような状況をいかに作っていけるかが鍵となると考えている。この課題については、平成22年度以降、健康づくり0次クラブの活動を引き続き注視していくことでゲノム疫学研究の社会実装の在り方を検討していきたいと考える。

また、こうした前向きな状況がある一方、不安も感じていることもある。それは、現在のところ、「ゲノム疫学研究」とは言うが、実際にはゲノム情報（遺伝子解析情報等）は市民に返却しないと決められており、現状として、研究協力者たる市民にとっては詳しく体の状態を調べてもらえる「0次健診」が受けられるというメリットしか存在していない。これは、平成21年度に実施した無作為抽出アンケートからもわかるように、ゲノム疫学研究の「いやだ」と思うところは何かという問いについて、4割以上の市民が「特にない」と答えていることが証明している。

本研究開発プロジェクトとしては、研究協力者たる市民の多くがゲノム疫学研究について、とりあえず「参加した」という現状から、様々な問題はあるが「参加した」という認識に変えていけるかが鍵となると考えている。

「研究に参加した」という意識が生まれてくることで、2つの行動変容の形が生まれてくる。その1つは、研究に対する見方や考え方が変わり、それにより市民の理解が進むことで応援や協力をしようという行動変容が生まれてくることである。もう1つは、その逆で、市民の理解が進むことで研究が持つ不安な要素が表面化し、研究参加を取り止めようという行動変容が生まれることである。

本研究開発プロジェクトでは、平成22年度以降、こうした市民の行動変容の過程を引き続き検討していくとともに、それに対して、関与者がどのようにコンセンサスを得て、どのような行動を取っていくことで、ゲノム疫学研究と地域づくりという2つのバランスを保っていくのかについても検討を重ねていくこととする。

(4) 開催したワークショップ、シンポジウム、会議等の活動

| 年月日 | 名称 | 場所 | 概要 |
|--------------------|------------------|---------------|---|
| 2009.4.2 他7回 | 健康づくり0次クラブ役員会 | 長浜市役所 他 | 平成21年度の活動計画、組織運営等についての協議を行う。 |
| 2009.4.25 他2回 | 地域講演&説明会 | 田根公民館 他 | 田根地区地域づくり協議会の協力を得て、健康づくり0次クラブがゲノム疫学研究の広報啓発を行う。 |
| 2009.5.8 他3回 | 健康づくり0次クラブ全体会 | 長浜市役所 他 | 平成21年度の活動状況の確認と報告を行う。 |
| 2009.5.11 他8回 | 健康づくり0次クラブ広報誌部会 | 北郷里公民館 他 | 情報誌「げんき玉」の作成 |
| 2009.5.29 他3回 | 出張「0次カフェ」 | 南郷里公民館 他 | 南郷里地域づくり協議会の協力を得て、ゲノム疫学研究の広報啓発を行う。 |
| 2009.6.28 | 健康づくりのつどい | 長浜文化芸術会館 | 健康づくり0次クラブ主催の健康づくりシンポジウム。研究者による講演会や市民・大学・自治体による意見交換会、歌や演舞などのアトラクションを行う。 |
| 2009.9.11 他2回 | 各種団体での卓話 | 長浜東ロータリークラブ 他 | 健康づくり0次クラブが各種団体に出向いてゲノム疫学研究に関する卓話を行う。 |
| 2009.9.24 他5回 | 健康づくり0次クラブHP構築部会 | 長浜市役所 他 | 健康づくり0次クラブがHPを活用してゲノム疫学研究の情報発信を行う。 |
| 2009.10.16 - 17 | 福岡県久山町視察 | 福岡県久山町 | 健康づくり0次クラブが福岡県久山町で行われている疫学研究の実績と、地域住民の関わりについて視察を行う。 |

(5) 研究開発実施におけるその他の活動
 特になし。

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況
 特になし。

5. 研究開発実施体制

(1) 個人情報保護グループ

- ① リーダー 安居 和美 (長浜市健康福祉部健康推進課 主査)
- ② 実施項目 研究協力者にとっての個人情報保護

(2) 長浜版バイオバンクグループ

- ① リーダー 米澤 辰雄 (長浜市総務部行政経営改革課 参事)
- ② 実施項目 長浜版バイオバンクの法整備

(3) 地域づくりグループ

- ① リーダー 藤居 敏 (長浜市健康福祉部健康推進課参事 兼 地域医療室長)
- ② 実施項目 疫学研究の地域づくりへの活用

6. 研究開発実施者

① 個人情報保護グループ

| 氏名 | 所属 | 役職 |
|-------|-----------------|-----|
| 安居 和美 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 主査 |
| 米田 裕治 | 長浜市企画部情報システム推進室 | 副参事 |
| 明石 圭子 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 副参事 |
| 三家 秀和 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 主査 |
| 藤田 高宏 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 主事 |
| 今村 友美 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 事務員 |
| 小林 聖子 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 事務員 |
| 大塚 宏未 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 主幹 |

② 長浜版バイオバンクグループ

| 氏名 | 所属 | 役職 |
|--------|---------------|-----|
| 米澤 辰雄 | 長浜市総務部行政経営改革課 | 参事 |
| 久保田 武次 | 市立長浜病院総務課 | 主幹 |
| 藤居 敏 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 参事 |
| 明石 圭子 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 副参事 |
| 三家 秀和 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 主査 |
| 藤田 高宏 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 主事 |
| 今村 友美 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 事務員 |
| 小林 聖子 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 事務員 |

③ 地域づくりグループ

| 氏名 | 所属 | 役職 |
|-------|-----------------|-----|
| 藤居 敏 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 参事 |
| 清水 厚子 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 専門員 |
| 明石 圭子 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 副参事 |
| 三家 秀和 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 主査 |
| 藤田 高宏 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 主事 |
| 今村 友美 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 事務員 |
| 小林 聖子 | 長浜市健康福祉部健康推進課 | 事務員 |
| 辻井 信昭 | NPO法人健康づくり0次クラブ | 理事長 |
| 外村 哲郎 | NPO法人健康づくり0次クラブ | 理事 |
| 児玉 治市 | NPO法人健康づくり0次クラブ | 理事 |

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 論文発表

(国内誌 0 件、国際誌 0 件)

(2) 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

①招待講演 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

②口頭講演 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

③ポスター発表 (国内会議 1 件、国際会議 0 件)

- ・発表者 明石圭子 (長浜市健康福祉部健康推進課)
- ・タイトル 地域に開かれたゲノム疫学研究のためのながはまルール
- ・学会名 科学技術と社会の相互作用 第2回シンポジウム
- ・日時 2009.4.25
- ・場所 アキバホール富士ソフトアキバプラザ5F

(3) 新聞報道・投稿、受賞

①新聞報道

| 掲載日 | 掲載新聞 | 表題 |
|-----------|--------|--------------------------------|
| 2009.6.2 | 中日新聞 | 0次予防 10分野で研究計画 京大研究者 長浜市に提出へ |
| 2009.6.26 | 近江毎夕新聞 | 28日健康づくりのつどい ボランティア団体「0次クラブ」が |
| 2009.6.30 | 中日新聞 | 0次予防 研究計画承認 長浜市審査会 糖尿病や脳卒中、11件 |

②受賞

特になし。

(4) その他の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

1) 健康づくり0次クラブHP作成

健康づくり0次クラブからゲノム疫学研究と心と体の健康づくりに関する情報を発信するためのHP。

2) 健康づくりのつどい

健康づくり0次クラブ主催で、平成21年6月28日に開催されたゲノム疫学研究と健康づくりについてみんなで考えるイベント。地域にゲノム疫学研究を普及啓発するための目玉イベントとして実施。

3) 情報誌「げんき玉」の発行

市民目線からゲノム疫学研究と心と体の健康づくりについて情報発信を行う健康づくり0次クラブ発行の情報誌。